※本稿は石原和・神田秀雄・吉水希枝編『近代如来教と小寺大拙―研究と史料』（一般社団法人日本電子書籍技術普及協会、二〇二三年）の第一章を転載したものである。

清水諫見氏と「清水諫見氏旧蔵如来教関係史料」

神田　秀雄

一　「清水諫見氏旧蔵如来教関係史料」の基本的性格と如来教研究史の概要

「清水諫見氏旧蔵如来教関係史料」とは、如来教信者だった故清水諫見（しみずいさみ）氏（一九〇二―一九八五）から、一九七九年、一橋大学附属図書館に寄贈された[1]二〇七点の史料群をいう（以下、本書では原則として「清水氏史料」と略称する）。同史料群の性格を理解するためにはかなり細かい説明が必要となるが、ここでは取りあえず、次の二点を確認していただきたい。その一つは、昭和初年頃、清水氏が如来教の教学創出を先端的に担った人物の一人であったこと、またもう一つは、一般の研究者による如来教の研究は、後述する『民衆宗教の思想』の刊行（一九七一年）を機に、如来教の分派である一尊教団が教団史料を公開したことで可能となったが、同教団の所蔵史料には欠けているものが少なくなく、「清水氏史料」はそれらを補う役割を果たしつづけて今日にいたっていることである。

ところで如来教とは、一八〇二（享和二）年、尾張国愛知郡熱田新旗屋町（現、名古屋市熱田区旗屋）で、尾張藩士石河主水（いしこもんど）家の元奉公人の女性（喜之＝きの。姓不詳。当時四七歳。一七五六（宝暦六）―一八二六（文政九））が創唱した宗教であり、[2]江戸時代後期から明治期にかけて発生したいわゆる民衆宗教の一宗派である。また、一連の民衆宗教のほとんどが、一八七六（明治九）年以降、次第に「教派神道」に編成されていったのに対して、開教がもっとも早いとされ、金毘羅信仰や浄土系・日蓮系等の仏教思想を摂取するなど、習合的性格が濃厚な如来教は、「教派神道」の傘下となる道を選ばず、一八八二（明治一五）年以降、「宗教団体法」が施行された一九四〇（昭和一五）年まで、熱田白鳥町の曹洞宗白鳥山法持寺の境外仏堂「鉄地蔵堂」に事実上の本部を置く新宗教として活動を続けた。

その如来教が学界に認知されるようになった契機は、一九二七（昭和二）年、当時、東京帝国大学文学部助教授だった石橋智信（一八八六―一九四七）が、論文「隠れたる日本のメシア教―一尊教の教団生活とその信仰内容―」[3]を発表したことによって作られた。しかし、昭和初年以来の如来教研究を引き継ぎ、同教研究の本格的な進展に道を開いたのは、むしろ一九七一年の村上重良・安丸良夫編『民衆宗教の思想』[4]の刊行だった。というのは、上記の石橋論文の段階で、如来教には総数三〇〇篇ちかい膨大な教典『お経様』（教祖の説教記録の原本や写本）が伝存することが明らかにされていたものの、その『お経様』が一般にも披見可能になったのは、『民衆宗教の思想』の刊行に際して、分派の一尊教団（本部、金沢市弥生）[5]が教団史料を公開してからのことだからである。その『民衆宗教の思想』には、如来教、黒住教、天理教、金光教、丸山教、富士講等の教典・原典類が収載されたが、如来教については、総数三〇〇篇ちかいとされる教典のうちわずか三篇が翻刻収載されたにとどまり、その他の諸篇はまだ一般には披見されていなかった。そして、一九七〇年代のそうした学問状況に好奇心をそそられたことが、筆者（神田秀雄）と浅野美和子による如来教研究の出発点となった。

一九七六年に『お経様』の翻刻作業を開始して以来、神田と浅野はそれぞれ複数の論考や著書で如来教について論じてきている。[6]また、神田・浅野両名の共編で『如来教・一尊教団関係史料集成』と題する全四巻の史料集も公刊し、[7]両名は、その各巻にもかなり長文の解説論文を執筆している（以下、当該史料集に言及する際は原則として『史料集成』と略記し、各巻号もⅠ～Ⅳのローマ数字で略記する）。つまり如来教の研究は、太平洋戦争直後に石橋が他界してから、およそ四半世紀ぶりに「再開」され、『史料集成』が完結した二〇〇九年までに基本的な研究素材が翻刻刊行されて、本格的な研究の深化が期待される段階に入っていた。そしてその後、如来教像の再構成を目指す書物として、神田が新著を刊行したほか、[8]本書の編者石原和も、学位論文をもとにした書物を刊行して今日にいたっている。[9]そこで、詳細はそれらの諸研究に委ね、[10]以下の本稿では、清水諫見氏との出会いや同氏の生涯、「清水氏史料」の成り立ちについて説明しておきたい。

ただもう一点、実はお断りしておくべきことがらがある。それは、「清水氏史料」の一橋大学附属図書館への寄贈後も、その整理を担当した関係上、以後約三〇年間、当該史料は神田がお預かりしたままだったことである。もちろんその間には、当該史料の何点かを個々に翻刻して史料紹介し、『史料集成』ⅠとⅣには、それらを再録すると同時に別の史料も新規に翻刻収載する形で同史料集を完結させた。そしてその完結の翌年度末に当たる二〇一一年三月、整理済みの諸史料は同図書館に返納したが、それでも「清水氏史料」のかなりの部分は、未整理のまま神田の手許に残っていた。本書に直接つながる研究を始めたのは、その未整理分の存在を図書館からご指摘いただいたことがきっかけである。そこで、如来教に関係する論考や著書があり、また各種史料の整理にも実績を積みつつある石原和氏に協力をお願いし、さらに吉水希枝氏にも協力をお願いした。「清水氏史料」のおよそ半分は九〇余通にものぼる手書きの書簡（多くは毛筆）であるが、その全文翻刻を含めて、ここに「清水氏史料」の整理を完結できるのは両氏のご協力のたまものである。記して謝意を表する次第である。

二　清水諫見氏の生涯と「清水氏史料」の成り立ち

1　清水諫見氏との出会いと同氏の生涯

先述の『民衆宗教の思想』の解説で村上重良氏が指摘しているように、如来教という宗教は「反俗的な閉鎖性」に大きな特徴を持っている。それは明治維新以降における近代教団の形成過程で、中心的な指導者となった小寺大拙（一八三八―一九一三）の志向に由来する側面が大きいが、一九二七年の論文発表に始まる石橋智信の如来教研究も、当該教団のすべての僧俗から歓迎されたわけではまったくなかった。名古屋の御本元（ごほんもと）（今日の宗教法人如来教の本部青大悲寺の戦前・戦後にわたる通称）は、一九四〇年の宗教団体法の施行によって、法令に対応する規則を教団自身が整え、それを公開する事実上の義務を負うまで、石橋の研究に必ずしも協力的ではなく、同教の教典『お経様』も、一時期、石橋に披見させたほかは今日まで、一般公開はもちろん、教内向けの印刷・刊行もしていない。そのため、一九七〇年代以降に「再開」された如来教研究にとっては、当初、金沢市の一尊教団本部（一九二九年、如来教から分離した教団）如来庵が公開した『お経様』を中心とする教団史料がほぼ唯一の研究素材だった。しかも一尊教団の『お経様』には、目録[11]に篇名記載はあるものの、実際には所蔵されていないものが数十篇にものぼっていた。

そこで一九七〇年代から八〇年代にかけて、神田と浅野は、一尊教団所蔵史料の写真版（当時の金沢大学法文学部国史研究室蔵）を村上重良氏から借覧し、全文を原稿用紙に翻刻する作業を進める傍ら、金沢市の如来庵（一尊教団本部）や東京豊島区の東光庵（如来教の有力な末庵の一つ）を度重ねて訪問し、両教団の関係者から聞き取りを行うとともに、未公開史料の発掘やその他の情報蒐集につとめた。[12]またその過程で神田は、当時、一尊教団の大庵主であった寄正光尼（二〇一〇年代前半に物故）から、太平洋戦争期以前の教団史に詳しい、東京練馬区の阿弥陀堂主栗田善如尼（二〇〇〇年代前半に物故）[13]を紹介され、さらに同尼から、東光庵の信者清水諫見氏を紹介された。[14]そのお二人は、ともに後述する東光庵和尚清宮秋叟（きよみやしゅうそう）（一八六三―一九四一）の弟子だったのだが、ここでまず清水諫見氏について説明しておこう。実は筆者は、かつて「如来教百九十年史序説（一、二）」と題する論考をまとめ、特にその（二）で同氏の生涯にかなり詳細にふれたことがある。[15]そこで本章では、主に昭和初年までの前半生を中心に清水氏の生涯をあらためて紹介するが、本書には、最近判明した事項を補った「近代如来教史略年表（兼清水諫見氏略年譜）」を新規作成・別掲しているので、適宜、参照されたい。

清水諫見氏は、一九〇二（明治三五）年八月、当時の愛媛県八幡浜町（現、八幡浜市）に生まれ、満一五歳の一九一七（大正六）年頃、慢性腎臓炎の罹患をきっかけに、同町内に所在する如来教の末庵天性庵に参籠し、同教に入信した方である（一九八五年没）。翌一九一八年、御本元で出家して「了拙」の安名（出家名）を受けた後、同氏は清宮秋叟が和尚を務める東京西巣鴨の末庵東光庵に配属された。しかし同氏は、やがて師匠の了解のもとに還俗し、[16]一九二五（大正一四）年四月には日本大学専門部宗教科に入学したという。そしてその当時、東京帝国大学助教授で日大専門部講師を兼務していた宗教学者石橋智信に清水氏が師事したことが機縁となって、一九二七（昭和二）年、石橋は「隠れたる日本のメシア教」を『宗教研究』誌上に発表し、如来教を学界に紹介した。

あたかもその当時、包括的な宗教法制の整備を目指していた文部省は、「第

二次宗教法案」と呼ばれた法案の帝国議会への上程を準備しつつあり、そうした事情に明るかった清宮秋叟を中心とする関東の如来教信者たちは、まだほとんど知られていない如来教の存在を社会に「開顕」する運動を起こしつつあった。そこで、清水氏が日大専門部で石橋に師事したことは、石橋を顧問役として、如来教内に独自の教学を起こす運動に発展していった。その運動の最大の成果が、清水氏が編集を担当した教内誌『このたび』の刊行であり、同誌は、一九二八（昭和三）年二月の創刊号から同年一一月の第九号まで刊行された。[17] また同誌には、石橋智信、鷲尾順敬（東京帝国大学史料編纂官）らの教外研究者も寄稿したほか、清宮秋叟をはじめとする教内者もさまざまな形で寄稿し、清水氏執筆の「教祖の御生涯」も九回にわたって連載された。さらに、そうした「開顕」運動の過程で清宮秋叟は、「如来教中興の祖」と仰がれていた故小寺大拙の書簡をはじめとする関係諸史料を蒐集しつつ、当時、長編の教団史草稿『清宮秋叟覚書』を執筆したものと考えられる。[18]

なお、「開顕」運動の発生と前後して、如来教内には、一九二五（大正一四）年元旦に他界した御本元の空如庵主の後継者選定をめぐる「紛議」が起こり、約四年を要して、裁判所の裁定で後継庵主が決定されている。それらについてはとりあえず、先述の神田「如来教百九十年史序説（二）」や、本書に別掲の「近代如来教史略年表（兼清水諫見氏略年譜）」を参照されたい。

2　「清水氏史料」の構成

今回、本書では、当該史料群を次の五つに大分類している。

1　教祖在世時代から幕末期までに成立した史料群
2　小寺大拙の書簡と遺墨
3　明治・大正期に小寺大拙・清宮秋叟以外の如来教関係者が遺り取りした書簡・文書類
4　大正末年以降太平洋戦争後にかけて成立した史料群
5　その他

なお同時に、各大分類の下に細分類も設けながら、解説とは別に「清水諫見氏旧蔵如来教関係史料目録」を作成し、各史料の内容紹介も付しているので、個々の史料の内容を簡便に確認するには同目録を活用していただきたい。以下、今回の再整理のポイントに中心を置きつつ大分類ごとに各細分類の概要を紹介し、本書での取り扱いについて説明を加えておきたい。

まず1　教祖在世時代から幕末期までに成立した史料群の主な内容は、教祖の生前に成立した教祖伝『御由緒』、江戸の信者から届いた書簡に対して晩年の教祖が口述筆記を送らせた返信の写し『文政年中御手紙』、成立年月日未詳の『お経様』数篇のほか、教祖入滅後の名古屋の講中の指導者小寺一夢（小寺大拙の父）による口話筆記録等で、如来教の教典ないし準教典と呼ぶべき史料である（いずれも毛筆の和綴じ本、ないしは同じく半紙に毛筆で書かれたものを紙縒りで綴じたもの）。神田や浅野は、『史料集成』の刊行当時、そうした教典類の蒐集を最重要視する研究動向に無条件に従っていて、1の翻刻文はすべて『史料集成』Ⅰの冒頭とⅣにすでに翻刻収載済みであるため、[19] 本書には採録していない。

次の2　小寺大拙の書簡と遺墨のうち、下位分類の2—1　小寺大拙書簡が、実は今回、本書ではじめて翻刻紹介し、かつ重要視している史料群である。当該書簡群は、先述の小寺一夢の次男で「如来教中興の祖」と仰がれた小寺大拙（一八三八—一九一三）が、一八八一（明治一四）年から一九一三（大正元）年にかけて発信した書簡約八〇通（すべて毛筆で手書きされたもの）からなり、連名で発信されたものもあるが、実質的な執筆者（現存の書簡が直筆でない場合は原本の執筆者）はすべて小寺大拙だと考えられる。

「清水氏史料」が寄贈された当初、神田や浅野は、一尊教団所蔵史料の内容を直接補う役割を果たす上記1や、教団史に関するもっとも詳細な記事を含む『清宮秋叟覚書』（後述の4に分類）に特に注目しており、毛筆で書かれた近代の私信が約半数（一〇〇通余）を占める「清水氏史料」の全体を系統的に分析することには踏み込めずに過ごしてきた。しかし今回の再整理における翻刻作業を経た結果、2—1　小寺大拙書簡は、如来教の近代教団形成の経緯を直接伝える重要な史料であり、今後の議論の主要な素材になりうるものであることが明らかとなった。そこで2—1については、本項の最後にあらためてふれたい。

一方、2—2　小寺大拙執筆の教義文書・遺墨等には、膨大な『お経様』の内容を、日々の勤行で信者たちが読誦できるように短くまとめ直した教義文書『四部経略語』と『座禅圓』（成立はそれぞれ一八九七（明治三〇）年と一八九九（明治三二）年。ともに『史料集成』Ⅳに翻刻収載済み）のほか、今回はじめて翻刻紹介する『三毒之大魔を踏砕之縅』（毛筆本。一八九七（明治三〇）年頃成立か）等が含まれている。

さらに3　明治・大正期に小寺大拙・清宮秋叟以外の如来教関係者が遺り取りした書簡・文書類には、3—1　明治・大正期の御本元および東光庵関係者が遺り取りした書簡と3—2　明治期の東光庵関係者らが受領した公文書という二つの下位分類を設けており、そのうち3—1には2—1　小寺大拙書簡と年代的に重なるものが多い。今回、分類に当たって3—1を2—1に合併する方法もありえたが、「清水氏史料」に登場する小寺大拙とその周辺の人物の行動を追跡するには、別項目を立てる方が便宜だと判断した。3—1で書簡の差出人となっているのは、元尾張藩士の子孫で御本元の納所役を務めた一色随浪、東光庵の創設者金子大道、東光庵の信者で日本橋在住の古川長吉、一八八一（明治一四）年以前までに名古屋から東京へ移住して政府に出仕していた元尾張藩士寺尾正愛の子孫（寺尾貞心）らである（寺尾正愛は、2—1　小寺大拙書簡の約半数で宛先（宛名人）となっている）。なお、3—2　明治期の東光庵関係者らが受領した公文書は、一八九一（明治二四）年、東光庵が当時の本郷区丸山新町から同じく豊島郡巣鴨村へ移転することを東京府に届け出た公文書の控え一点である。[20]

4　大正末年以降太平洋戦争後にかけて成立した史料群には、4—1　清宮秋叟が毛筆で残した文書群（書簡を除く）、4—2　昭和初年までの如来教の『開顕』運動に関する史料群、4—3　清水諫見氏が受信・受領した書簡・文書等、4—4　宗教団体法施行後の『単立教会』設立申請関連書類、4—5　清水諫見氏が蒐集したと推定できる書籍・印刷物等という、五つの下位分類を設けている。

4—1には、「媮姪（りゅうぜん）如来喜之・伝記断片A」「媮姪如来喜之・伝記断片B」（ともに『史料集成』Ⅰに翻刻収載済み）および先述の『清宮秋叟覚書』（『史料集成』Ⅳに翻刻収載済み）が含まれている。それらのうち『清宮秋叟覚書』は、如来教内でまとめられたもっとも詳細な教団史の一つだが、正確な年代を欠く記事が多いのが難点だった。しかし今回、「小寺大拙書簡」と「明治・大正期の御本元および東光庵関係者が遺り取りした書簡・文書類」が翻刻されたことで、『清宮秋叟覚書』の記事の年代もより正確に推定できる部分が増えた。なお4—1には、今回新たに翻刻収載した「末庵の成立事情」（原題なし）や「このたびの新しい信仰……」（同）等のメモ的な短編も含まれている。

また4—2　昭和初年までの如来教の『開顕』運動に関する史料群には、一九二七（昭和二）年に当時の帝国議会で審議された「第二次宗教法案」に対応して、如来教を社会に「開顕」し、明確な法的保護も受ける形で教団の近代化を実現しようとした運動（結果的には当該法案の審議未了・廃案により頓挫）に関連する、四〇余点の史料からなっている（うち、謄写版印刷が劣化して判読しにくくなっているものについては、今回、できるだけ翻刻文を掲載した）。なお4—2には、清水氏が編集を担当し、合計九号にわたって活版で印刷刊行された教内誌『このたび』の本誌（清水諫見氏による連載記事「教祖の御生涯」をはじめ、計一八篇分の記事は『史料集成』ⅠとⅣに収載済み）[21]や、同誌への掲載を期して書かれた草稿も含まれている。さらにまた、「開顕」運動が頓挫し、同時に空如前庵主の後継者選定問題がこじれる中、毛筆の『お経様』諸篇のペン書による浄書を清水氏が単独で試みたと推察される原稿も一六点が伝えられている（もともとは二〇点あったらしいが、四点が逸失）。

4—3　清水諫見氏が受信・受領した書簡・文書等には、一九一八（大正七）年秋、清水諫見氏が御本元の浅野恵大和尚から「了拙」の安名（出家名）を授けられたことを証する文書（今回、翻刻紹介）のほか、一九二七（昭和二）年から翌年にかけて、師匠の清宮秋叟から清水氏が受信した計五通の書簡や、教祖の経歴を確認する目的で、清水氏が尾張藩士石河主水家の子孫宛に送った質問状への当該子孫による返信のほか、一九四〇（昭和一五）年の「宗教団体法」施行後に、「単立教会」設立を目指した御本元からの依頼を受けて、清水氏が活動していた様子を伝える「御本元侍者」の書簡二通等も含まれている。なお、この下位項目を設けた主目的は、大正・昭和期の如来教で清水氏がどのような活動を展開していたのかを明らかにすることにあるため、当該史料はすべて本書で全文翻刻紹介している。

4—4　宗教団体法施行後の『単立教会』設立申請関連書類は、「宗教団体法」の施行に対応し、すでに「宗教結社」の届出をしていた如来教が、一九四二（昭和一七）年以降、「単立教会」の設立を目指したことに関連する合計一四点の史料からなっている。そのうち、作成にもっとも時間と手間をかけたと推察される『如来教団由緒及沿革概要』は、すでに『史料集成』Ⅰに収載済みだが、先述の4—3の「御本元侍者」書簡によると、当時、御本元の依頼を受けた清水氏は、引き続き顧問役を務める石橋智信と連絡を取りながら「教会規則」の起草にも関わっていたようで、それは4—4中の「如来教会教規」の草稿だった

可能性が高い。各史料の具体的な執筆者を個々に特定することは困難だが、総じて4―4は、石橋智信と清水諫見氏の遣り取りを前提に、最終的には執筆者を特定せずに（事実上御本元の責任で）作成された体裁になっている。ただし、史料番号四四〇五や四四〇七の史料等には、石橋智信のかなり深い関与を窺わせる部分が多い。なお、史料番号四四〇九から四四一三の［活字版『お経様』］は、清水氏がペン書きで浄書していた『お経様』（4―2の四二二六から四二四一）と、浄書ないし翻刻の対象とされた篇は重なっていないが、『『お経様』は誰もが読める形で保存されるべきだ」との清水氏の発想を引き継いで、初めて印刷・刊行された単立教会設立申請関連書類と見ることができよう。

4―5　清水諫見氏が蒐集したと推定できる書籍・印刷物等は合計九点からなり、大正末年から昭和初年にかけて、師匠の了解のもとに日大専門部に在学していた清水氏が蒐集して学習したと認められる仏典・仏教学書が三点、文部省内で「第二次宗教法案」の策定が進められていた頃の新聞記事を切り貼りした「スクラップブック」（清水氏自身の投稿記事を含む）、一九四〇（昭和一五）年施行の「宗教団体法」と「同施行令」「同施行規則」を印刷した冊子（文部省刊）、「昭和一七年四月一二日」付け『中外日報』紙（「宗教結社如来教　単立教会を出願　当局慎重を期す」の記事を掲載）、太平洋戦争後の一九四六（昭和二一）年に石橋智信が如来教に関する記事を執筆・掲載した『談論』誌、一九六一（昭和三六）年刊行の安部富石『合同の次に来るもの』等が主な内容である（安部富石は、大正期に如来教の末庵として創建され、原田清泉がその庵主に就任後、同尼と庵自体がいったんは如来教から破門されていた大阪の江石庵が、一九六〇年、御本元との「合同」を果たした後、御本元和尚に就任した人物で、当該書籍はその著書の一つ）。

最後の**5　その他**は、以上のどれにも分類できない史料一三点からなり、うち七点が毛筆の墨蹟で、さらにそのうちの五点は日大専門部在学中の清水氏自身による仏説・仏論等の書写練習ないしはノートと推定できる。またそれらとは別の、原稿用紙各一〇枚ほどで書かれた随筆三篇は、記事内容から、いずれかの如来教の末庵（おそらくは東光庵）の刊行物（教内誌紙）に、「雪の舎　汎」のペンネームで清水氏が寄稿した草稿だと推察できる。

ここで再度**2―1　小寺大拙書簡**に話題を戻し、約八〇通にわたるその成り立ちにふれて、「清水氏史料」の性格をさらに踏み込んで検討しておこう。

「如来教中興の祖」と仰がれた小寺大拙が、一八八一（明治一四）年から他界の前年に当たる一九一二（大正元）年にかけて発信した約八〇通の書簡群は、実は、①封筒が失われたまま丸められて束となっていたもの（明治一四年―同二七年頃発信）、②横並べにして巻物に表装された一一通分（明治一五年―同三三年に発信）、③約二〇通の封書（大半は明治四三年―大正元年に発信。封筒のみで通信文が失われたものやその逆のもの、別の封筒に誤って入れられていた書簡等を含み、総数の正確な確定は困難）、の三種に大別できる。[22]

そのうち②に属する書簡には①と年代が重なるものもあるのだが、単に成立年代順に整理せず、敢えて外的形状にこだわった分類を試みたのは、蒐集された事情と外的形状が深く関わっていると考えたからである。特に②の巻物（Ⅲ頁上）の巻末に貼り付けられている八月一二日付（明治一五年と推定）寺尾是道宛の書簡（二二〇）の末尾には、「金子士え誂へ」という後筆（異筆）の文字を確認でき、それは東光庵の創設者金子大道のために、同庵の後継責任者清宮秋叟が、一一通の大拙書簡を集めて表装したことを表すと推察できる。[23]

また①の書簡群は、金子大道らの東光庵在庵者に宛てたもの（「総御講中様」宛を含む）や、寺尾を含む複数名宛の書簡数通も含んではいるものの、その他のほとんどは寺尾正愛（是道）宛となっている。しかも複数名宛の大拙書簡は、祝辞や謝辞の伝達依頼を主目的とした書簡にほぼ限られるのに対して、寺尾一人に宛てた書簡には、第三者には聞かせにくいような、微妙な人間関係に言及したもの（主には金子大道を批判するもの）が目立っている。

さらに③の書簡群は、東光庵や大宮の末庵日明軒等に在庵する僧尼に向けて大拙がその晩年に発信した書簡を、一九一三（大正二）年の大拙の他界後に、東光庵の責任者となった清宮秋叟が集めたものと想像できる（明治四四、四五年を中心に発信されたもので、各庵に配属ないし派遣されていた僧尼が受信したまま所持していたものと推察できる）。

総じて言えば、**2―1　小寺大拙書簡**（①～③）や**3―1　明治・大正期の御本元および東光庵関係者が遣り取りした書簡・文書群**に属する書簡は、年月の経過にともなって自然に東光庵やその周辺に蓄積された書簡というよりも、むしろ一定の意図のもとに蒐集されている可能性が高い。そこで、その蒐集者や蒐集意図（目的）について神田の仮説を掲げておくと次のようになる。

まず当該史料の蒐集者は、大正末年から昭和初年にかけて展開された如来教の「開顕」運動で中心的な役割を果たした清宮秋叟（当時の東光庵和尚）と、同人の指示のもとで当該運動の末端を担った人々（清水諫見氏が当然含まれる）であり、史

料の提供者は、寺尾正愛（是道）の子孫や東光庵の信者古川長吉の子孫、末庵に在庵中の僧尼等の如来教関係者だと考えられる。また史料蒐集の意図は、本来、自分たちの信仰の由来を掘り起こすこと全般にあったと見るべきだが、昭和初年、「第二次宗教法案」が立案され、その法案が成立して施行される可能性もあったことを考慮すると、その主眼は、特に秋叟らが体験的に知り得ていなかった、明治初年以来の如来教関係者の足跡を具体的に明らかにし、それを手がかりとして如来教の改革運動を推進することだったと考えられよう。

なお、「小寺大拙書簡」のうち、大拙の晩年に発信された③や、大拙書簡の一部を記念品のように金子大道に渡すべく編まれたと推定できる②の巻物は、いずれも大拙の親筆と見て間違いないが、もっとも年代の古い①の書簡群には、巻紙でない半紙大の白紙のほかに、しばしば枠付き有罫用紙（半紙大）が使用されていたり、後筆ないし異筆による書き込みがあったりしており、すべてが大拙の親筆とは認められない。しかし「小寺大拙書簡」（特に①と②）は、右のように、明治期の如来教史を明らかにする意図のもとに蒐集されている可能性が高く、親筆以外の書簡もむしろかなり正確に複写されていると考えられる（改竄の可能性はきわめて低い）。そこで本書では、親筆か否かを逐一判定することは保留して、

2―1　小寺大拙書簡および3―1　明治・大正期の御本元および東光庵関係者が遣り取りした書簡・文書群を中心に極力翻刻文を掲載し、主に明治維新以降の如来教はどのような問題を抱えつつ近代教団を形成して今日にいたっているのかを、展望するための素材として提供しておきたい。

註

1　その寄贈は、当時、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程に在学中の神田が、故安丸良夫教授の賛同を得て、散逸防止の手立てとしてお願いし、清水氏がそれに応えてくださった結果、実現したものである。

2　文化庁篇『宗教年鑑　令和三年版』に掲げられている前年の統計では、宗教団体（宗教法人を含む）は寺院二八、布教所七で合計三五。教師は男一人、女八人で合計九人。信者は三五六一人となっている。

3　石橋智信「隠れたる日本のメシア教―一尊教の教団生活とその信仰内容―」（『宗教研究』新第四巻四―五号、一九二七年）。

4　村上重良・安丸良夫編『民衆宗教の思想』（日本思想大系第六七巻。岩波書店、一九七一年）。

5　文化庁編『宗教年鑑　令和三年版』の前年度分統計では、宗教団体（宗教法人を含む）が教会三とあるだけで、信者数は記載がない。なお、「代表役員」として記されている寄正光大庵主はすでに他界されていることが確認できているので、現在、同教団はほとんど活動を停止している模様である。

6　如来教について両名がまとめた最初の書物は、それぞれ、神田秀雄『如来教の思想と信仰』（天理大学おやさと研究所、一九九〇年）、浅野美和子『女教祖の誕生』（藤原書店、二〇〇一年）である。

7　神田秀雄・浅野美和子編『如来教・一尊教団関係史料集成』（清文堂出版、二〇〇三―〇九年）。なお、同史料集は、後述する村上重良校注『お経様―民衆宗教の聖典・如来教』（東洋文庫三一三）の続刊がなされない見通しとなったため、神田と浅野が改めて刊行を企画したものである。

8　神田秀雄『如来教の成立・展開と史的基盤』（吉川弘文館、二〇一七年）。

9　石原和『「ぞめき」の時空間と如来教』（法蔵館、二〇二〇年）。

10　なお、前掲註7の『如来教・一尊教団関係史料集成』第四巻の「別冊（その2）史料目録・諸表」には、二〇〇九年までに発表された如来教関連研究の一覧を掲げてある。前掲註8の拙著も参照されたい。

11　一尊教団の元大庵主故田中正悦尼作成の『御説教御目録』と題する目録で、『史料集成』Ⅳの「別冊（その2）」には、編年順の諸篇と年月日不詳の諸篇に分けて、その記事内容を一覧表にまとめてある。

12　神田と浅野は、名古屋市熱田区の宗教法人如来教の本部御本元をも何度か訪れ、『お経様』の聴聞は許された。しかし御本元は、戦前における石橋智信の例をほぼ唯一の例外として、その後、

研究目的の史料調査には応じていない。なお、二〇〇〇年代まで東光庵には、『お経様』の公刊を期待するご信者も少なくなく、神田と浅野は、それらの方々から資金的ご援助もいただいた。また、神田と生前の村上重良氏が、一尊教団の末庵慈尊庵（東京都中野区江古田）へ来庵した寄正光大庵主に依頼した結果、金沢の如来庵が所蔵せず、慈尊庵が所蔵していた『お経様』約一〇篇が追加公開された（それらは『史料集成』各巻にすでに翻刻収載済み）。

13　栗田善如尼は、太平洋戦争後の一九四六（昭和二一）年、「宗教法人令」によって宗教法人となった一尊教団傘下の「一尊教会慈尊庵」（註12参照）で、一時、主管者を務められた方である。

14　その当時、神田と浅野は、一尊教団所蔵の『お経様』諸篇の翻刻作業中だったが、その後、翻刻原稿の約六分の一は、村上重良校注『お経様―民衆宗教の聖典・如来教―』（東洋文庫三一三、平凡社、一九七六年）として公刊された。しかし、東洋文庫としての続刊はなされず、両名は改めて、『如来教・一尊教団関係史料集成』全四巻の刊行を企画することとなった。前掲の註7も参照。

15　神田秀雄「如来教百九十年史序説（一）」（『天理大学学報』第一六二輯、一九八九年）、同「如来教百九十年史序説（二）」（『天理大学学報』第一六三輯、一九九〇年）。なお、神田が天理大学の学内誌に発表した論考は、天理大学のウェブ上のリポジトリーで公開されている。以下、右の（二）を主な典拠とする。

16　清水氏生前の証言によると、当時の如来教内では出家のままの大学入学は認められなかったという。

17　教内誌『このたび』の停頓後、清水氏が私家版の『このたび二巻』を刊行したこと等の詳細については、註15の拙稿（二）や『史料集成』Ⅳの「別冊（その2）」一五〇―一五五頁を参照。

18　同史料は、合計一〇八枚の半紙に毛筆で書かれた草稿で、冒頭の約三分の一が散逸している。本来の表題はその有無を含めて未詳のため、表題は仮に神田が付したものである。『史料集成』Ⅳに全文の翻刻文や解説を収載しているので、詳細は同書を参照されたい。なお同史料は、本来は刊行を意図してまとめられつつあったと推測できるが、教内に発生した諸事情もあって、結局は刊行できなかったと考えられる。

19　『史料集成』Ⅰの途中からⅡとⅢ、そしてⅣの途中までは、一尊教団所蔵本を中心に、既公開の『お経様』諸篇を全四巻のすべてにわたって収載している。

20　なお、理由は不明であるが、この文書は東京都公文書館には所蔵されていない。

21　教内誌『このたび』各号（清水氏が私家版として刊行した『このたび二巻』を含む）の本文は、一橋大学附属図書館ウェブページのうち、「蔵書検索サポート」→「コレクション・人物文献」→「所蔵コレクション」に、「清水諫見氏旧蔵如来教関係史料」の頁がちかく開設され、そこに写真版が掲げられる予定なので、そちらを参照されたい。なお、『史料集成』ⅠとⅣに翻刻収載済みの記事については、本書所収の「収載史料目録」のうち、4―2の部分に掲げた『このたび』各巻号の目次に太字で表記している。

22　三種の外観については、本書冒頭に掲げた写真を確認されたい。

23　その十一通は、金子大道宛の大拙書簡五通と寺尾正愛（是道）宛の大拙書簡六通とからなっている。